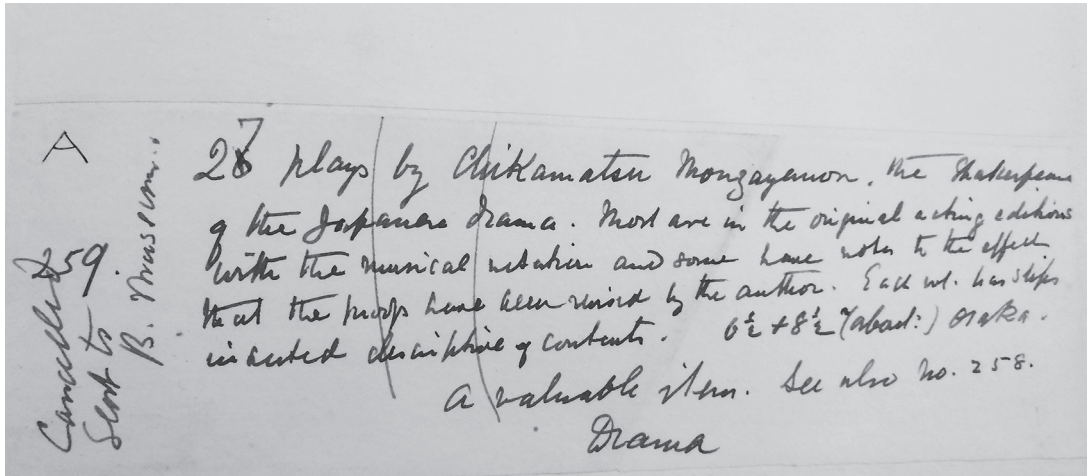


ケンブリッジ大学図書館蔵「アストン和書目録」について (12)

虎尾達哉

9. 大英博物館に寄贈されたアストン旧蔵「近松27戯曲」をめぐる

アストン旧蔵書のほとんどは彼の死後ケンブリッジ大学図書館に廉価で売却されて今日当図書館に伝わるが、例外的に他機関に寄贈（売却）されたものも存する。「アストン和書目録」のA259はさようの一例である。これによれば、「近松門左衛門の戯曲」27点はケンブリッジではなく、大英博物館（British Museum）に送られたのであった。以下に、その原文と和訳（前掲を一部修訂）さらに写真を掲げよう。



(原文)

A 27 plays by Chikamatsu Monzaemon. The Shakespeare
of the Japanese drama. Most are in the original acting editions
259 with the musical relation and some have notes to the effect
that the proofs have been revised by the author. Each vol. has slips
indicated descriptive of contents. 6 1/2 x 8 1/2 (about?) Osaka
A valuable items. See also No.258

*

Drama

(左余白下方*ヨリ上方二次ノ3行記載アリ)

Cancelled

Sent to

B. Museum)

(和訳)

259 <末梢> 「近松門左衛門による27の戯曲」 日本の戯曲のシェークスピア。

ほとんどは上演用の本であり、劇中の音楽との関連を示す。また、作者が校正刷りを読み直した旨の注記を有するものもある。各冊には内容紹介用の付箋がつく。

6 1/2 × 8 1/2 (およそ?) 大坂 逸品である。258番も見よ。

戯曲

「取り消し。大英博物館に送致」

この近松の戯曲は大英博物館の図書館を経て、現在は1973年に独立・統合された大英図書館 (British Library) に所蔵されている。もっとも、本図書館にアストンの蔵書印を有する和書が所蔵されていることは夙に知られており、川瀬一馬・岡崎久司両氏共編にかかる『大英図書館所蔵和漢書総目録』(講談社、1996年、以下『総目録』)にも当然のことながらアストン旧蔵和書が採録されている。そこで、今この『総目録』に拠って、アストン旧蔵の「近松27戯曲」を特定してみよう。

『総目録』に採録されたアストン旧蔵和書(『総目録』には「アストン舊蔵」の注記あり)のうち、「近松27戯曲」に属すると思われるものは『総目録』五「音楽・演劇」5「浄瑠璃」(p134 - p138) 所載の近松門左衛門作浄瑠璃本24点である。以下に、假に番号を付して掲げよう。

1. 藍染川
2. 佐々木先陣
3. 天智天皇
4. 初日上卷本領曾我
5. 浦嶋年代記
6. 最明寺殿百人上臈
7. 最明寺殿百人上臈
8. 紅葉(栴)狩劔本地
9. 男女心中重井筒(追善重井筒)
10. 心中二枚繪草紙
11. 堀川波鼓
12. ひらがなけいこ本丹波與作待夜の小屋節
13. 淀鯉出世瀧徳
14. 二郎兵衛おきさ今宮の心中
15. 曾我虎が磨
16. 吉野都女楠
17. 長町女腹切
18. 夕霧阿波鳴渡
19. 天神記
20. 山崎與次兵衛壽の門松

- 21.博多小女郎波枕
- 22.日本武尊吾妻鏡
- 23.後太平記四十八卷目津国女夫池
- 24.後日下巻加増曾我

筆者はこの数年来、大英図書館に赴き、これらの近松浄瑠璃本について実地に調査を行ってきた。それによれば、上記24点のうち、7は現存しないが、その他の現存する23点（22を除きすべてにアストンの蔵書印（「英國阿須頓蔵書」）あり）は先の「和書目録」A259の書誌記載とよく符合する。すなわち、これら23点はいづれもA259が言う法量（6 1/2×8 1/2インチ）と一致し、またその23点のうち4、5、6、10、11、12、14、17、18、20、23の11点の刊記には作者近松が校正刷りを読み直した旨の注記「重而予以著述之本、令校合候畢、全可為正本者歟」が見られる。

しかしながら、それらにもまして決定的な符合は現存23点のほとんどすべてに内容紹介用の付箋（縦5センチ×横11・12センチ前後）が存する点である。『総目録』でも1、6、15の3点については「アストン自筆英文小紙片あり」と注記しているが、実際には8を除く22点すべてにそのような「小紙片」が付けられている。現在は失われているが、当然8にも同様の付箋があったとすべきであろう。

以上の点から推して、現存23点が「アストン和書目録」A259の「近松27戯曲」に属するものであったことはまったく疑いを容れない。なお、これらの23戯曲は各冊に捺された大英博物館の印記から1912年10月12日に当博物館が正式に受入れたものであった。

それでは残りの4点（戯曲）は近松のいかなる浄瑠璃本で、どこへ行ったのであろうか。先づ、その4点のうち3点について結論を示せば

- 25.おなつ清重郎五十年忌哥念佛
- 26.上巻女殺油地獄
- 27.主馬判官盛久

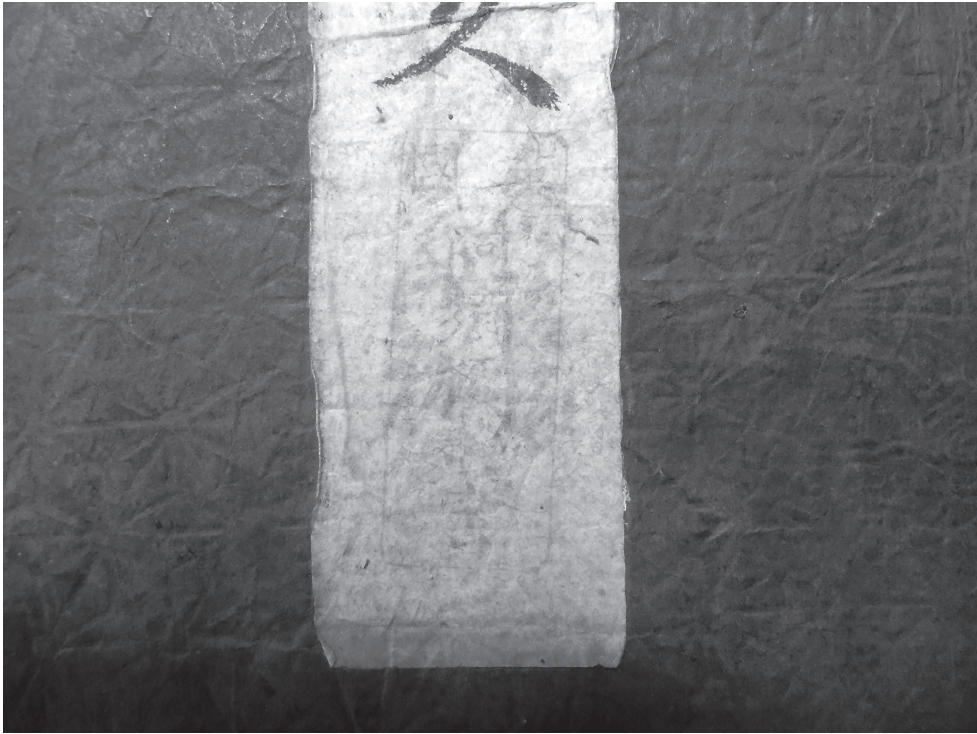
であり、いづれも大英図書館に現存している。

上記3点のうち、25・26は実は『総目録』にも採録されている。そこではともに「アストン舊蔵」の注記を闕くものの、前掲1以下の浄瑠璃本同様アストンの蔵書印が明瞭に認められるから、アストン旧蔵書に外ならない。ばかりか、A259記載の書誌記載（法量・刊記・付箋）についてもよく符合（ただし26は前掲の作者の刊記なし）し、1912年10月12日に受入れたことを示す大英博物館の印記も存する。この2戯曲がやはり「近松27戯曲」に属するものであることは確実である。

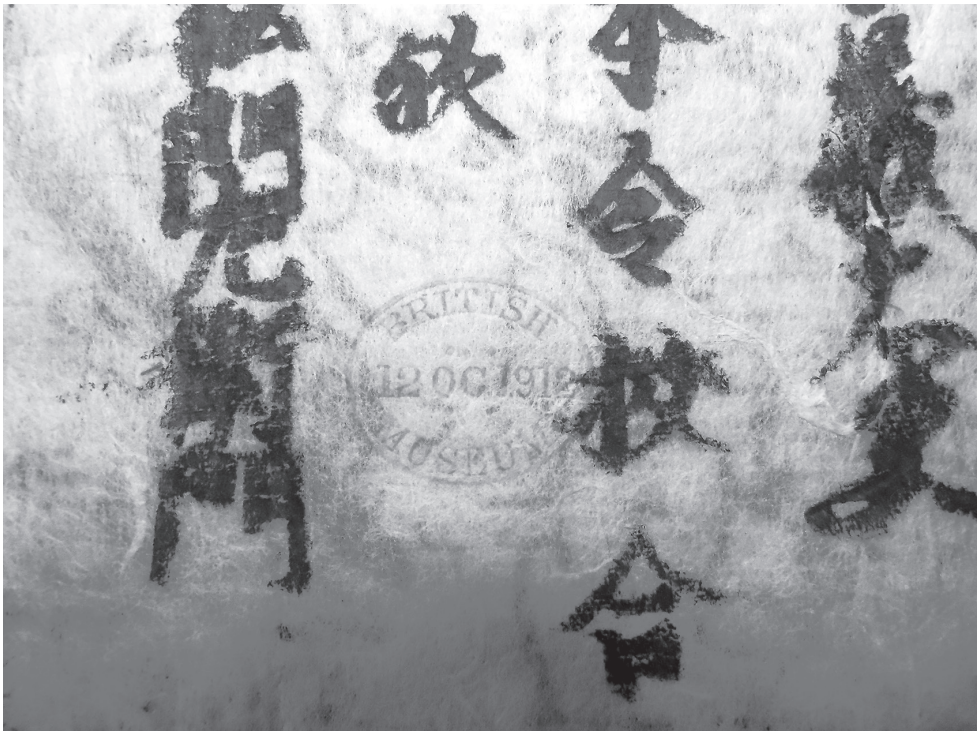
残りの27はなぜか『総目録』に採録されていない。しかし、この浄瑠璃本にもまたアストンの蔵書印が認められ、A259所載の書誌記載とも符合し、大英博物館の受入れ年月日を示す印記も一致する。したがって、この戯曲も「近松27戯曲」に属するものであるとすべきである。



主馬判官盛久（大英図書館蔵）



同上 アストン蔵書印



同上 大英博物館受入れ印

以上よりすれば、先の近松浄瑠璃本23点と『総目録』ではアストン旧蔵近松浄瑠璃本として採録されなかった3点とを合わせた26点がA259に見える「近松27戯曲」中の26戯曲として特定されたことになる。

しかしながら、いうまでもなく特定は未了である。「近松27戯曲」にはなお1点足りないからである。一見すると、『総目録』が採録したアストン旧蔵近松浄瑠璃本24点にアストン旧蔵書として、あるいは本自体が採録されなかった上記3点を加えればちょうど27点となることから、これをもって特定完了とすべきやにも思われよう。しかし、筆者はさよの単純な数合わせには少なからず躊躇を覚える。この数合わせは具体的には、現存しないアストン旧蔵近松浄瑠璃本7を「近松27戯曲」の中に加えることを意味するが、この7は果たして実際に存在したのであろうか。

もし、実在したとすれば、『総目録』の編纂が行われた当时には存在したものの、その後いつれかの時期に失われて近年にまで至ったものとしなければならない。しかし、『総目録』の編纂作業が行われた1980年代後半を20年以上も遡る1962年・63年当時、在英中の鳥越文蔵氏も大英図書館（大英博物館）所蔵の浄瑠璃本を調査・報告しているのであるが（『元禄歌舞伎攷』、八木書店、1991年）、それを見ても、上記6の最明寺殿百人上臈については詳細に取り上げているものの、同本の7についてはまったく言及していない。すなわち、すでにこの時期において現存していなかった可能性が高いのである。むろん、この時期不明となっていたものが後に出現して『総目録』編纂時には川瀬氏らの目に触れて採録され、その後になって再び姿を消したという経緯も考えられなくはないが、大英図書館（大英博物館）の蔵書管理はさまでに杜撰であろうか、俄かに信じがたい。また、『総目録』と相前後しケネス・ガードナー（Kenneth Gardner）氏によって著された *Descriptive Catalogue of Japanese Books in the British Library Printed Before 1700*（『大英図書館蔵日本古版本目録』、大英図書館・天理図書館、1995年、以下『古版本目録』と略称）においても、「CHIKAMATSU SHOHONSHU（近松正本集）」として近松の浄瑠璃本が説明されているが、最明寺殿百人上臈が2点存する記述は見られない。上記のごとき経緯の蓋然性は低いとすべきであり、『総目録』が採録した7の実在性こそ疑うべきであろう。いささか煩瑣に及ぶが、この7と同本6についての『総目録』の記載を検討してみよう。

6. 最明寺殿百人上臈 元禄一六刊（別「はちの木」）竹本筑後掾正本 初印 七行本[アストン自筆英文の小紙片あり]表紙に「この上りりは元禄十六癸未三月四日初日也座元興行竹元筑後掾」と書す。見返に「この書女鉢木の段に〈おくわしはないがとタシものおがぬたなをや云々の文あり西鶴が〉と墨書あり」

近松門左衛門

（アストン舊蔵）

7. 同 元禄一六刊（別「はちの木」）後印 七行本 判紙小本[元禄一六上演の朱筆あり]

近松門左衛門

（アストン舊蔵）

これによれば、6と7の記載の異同は主に6の詳細な記述に対し、7が簡略であることによるものである。なるほど、6の記載に見られず7のそれに見られる記述として、版型の「判紙小本」があるが、6の現存本の版型を実地に見れば、他の「判紙小本」とされたほとんどの浄瑠璃本とまったく同様であって、記載ではそれが落ちているにすぎない。6と7の記載は一つの本について、一方は詳細に、他方は簡略に述べたものではなからうか。とりわけその感を深くするのは、6・7両

記載ともにその表紙に「元禄16年上演」の旨が朱筆されていると述べている点である。同版の二つの版本があったと仮定して、両本の書誌内容が精粗の差こそあれ同様となるのはむしろ当然のことである。しかし、両本ともに表紙にまったく同内容の朱筆が加えられていることは何か特別な事情でもない限り、すこぶる不自然といわざるをえない。

もっとも、『総目録』の6・7の記載には一点のみではあるが、明らかな異同が認められる。版の状態について、6を「初印」とするのに対し、7を「後印」とする点である。しかし、「初印」と「後印」には印行年が判るか、字画の欠落・擦れが認められるといった場合でないかぎり、明瞭にして客観的な境界が存するわけではない。両者いずれとも評しうる場合も少なくないであろう。7を「後印」とする点がただちに6とは別の本が実在したことを証し立てるわけではない。同じ6の状態について、ある時はこれを「後印」と評し、また別の時はこれを「初印」と評したが、その評価の段階を異にする（ために全体の精粗も異にする）二つの編纂用の資料が二つながら採録されてしまったというような事情が考えられるであろう。筆者は『総目録』が採録した7は最初から実在せず、6についての不要資料の混入が7の採録を招いてしまったのではないかと推測する。川瀬・岡崎両氏の偉業を毀損する意図は毫もないが、一つの臆説として呈示しておきたい。

さて、もし筆者が推測したように7を近松浄瑠璃本として実在せざるものとした場合、特定された「近松27戯曲」は依然26点にとどまり、なお1点を残している。これはいかに考うべきか。

大英図書館では、上掲の1-6、8-27の近松浄瑠璃本26点は実際には同じ函架番号(16104 b20)の下に一括保管されている。具体的には「JŌRURI TEXTS」VOL.1～VOL.3の三函の中に収納されているのであるが、そのJŌRURI TEXTS(浄瑠璃本)の数は実は都合27点である。先の26点とともに一括保管されたのは

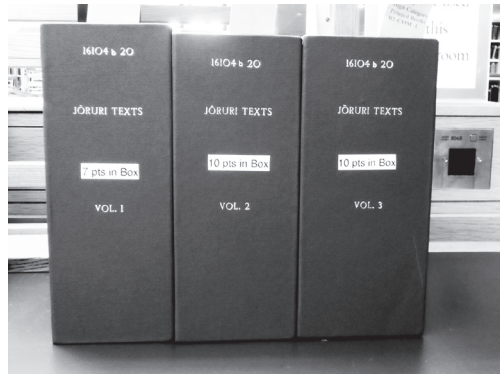
28.小そでうり

である。そして、この28もまた『総目録』が採録しているように、アストン旧蔵本(アストンの蔵書印あり)であり、实地に見てみると、先の「和書目録」A259の書誌記載(分量・付箋)とも符合し、1912年10月12日に受入れたことを示す大英博物館の印記も存する。

ただし、この浄瑠璃本「小そでうり」は宇治加賀掾や竹本義太夫(筑後嬢)ではなく、山本角太夫の正本であるから、近松の作ではない。したがって、厳密には「近松27戯曲」の一に数えることはできない。しかしながら、この本はA259の書誌記載と符合するばかりではなく、先の26点の多くとある重要な一点で共通する。それは1、2、4、8、10、13、14、15、17、18、21と同じく、この本もかつて柳亭種彦の蔵本であった点である。見返には種彦の手識も残されている。

28はたしかに近松本ではない。しかし、アストン以前に、かつて種彦が所蔵し、その直筆の識語まで有するという希覯性を諸他の近松本と親しく共有していた。このことから、この28を他の26点の近松本と一体の特別な浄瑠璃本コレクションと見做し、あえて「近松27戯曲」の中に加えることにしたのであろう。A259を見ると、アストンは当初「26 plays by Chikamatsu Monzaemon」と書き、のちに「26」を改めて「27 plays by . . .」としている。この訂正に26点の近松本と1点の非近松本との間の「異なりつつも、それを超えて一体」といった両者の関係を看取するのは深読みすぎようか。

ともあれ、A259に記載された「近松27戯曲」は一体の特別のコレクションとして大英博物館に入り、博物館もまたこれらをそのまま一体のものとして同じ函架番号の下に保管し、大英図書館でもそれを引き継いで今日に至っていると考えるのが最も穏当である。先のガードナー氏による『古版本目録』の「CHIKAMATSU SHOHONSHU（近松正本集）」は、実はかくて保管されてきた上記27点の浄瑠璃本について記述したものにほかならない（ただし、そこには「近松27戯曲」についての言及はなく、「小袖うり」を近松作としている）。



JŌRURI TEXTS (大英図書館蔵)

ところで、本節冒頭でみたように、「アストン和書目録」A259の記載は抹消され、本文と方向を異にして「Cancelled Sent to B. Museum」（「取り消し。大英博物館に送致」）の文言が書き付けられている。これは別筆の可能性（たとえば筆跡が似ているサトウ）もないではないが、アストンの「S」字や「B」字の大文字筆記体の特徴からして、アストンの同筆と見てほぼ間違いあるまい。そして、もしそうであるとすれば、アストンは「和書目録」を書き上げた1908年8月以後1911年11月22日死去までのある時点で、ケンブリッジ大学図書館への売却が決まっていた蔵書（サトウ旧蔵書も含む）のうち、この「近松27戯曲」についてはそれを取り消し、大英博物館に送致することとし、その旨A259に書き付けたものと想定される。かくして、アストン死去の翌1912年10月12日、アストンの遺産管財人はその遺志により、「近松27戯曲」を大英博物館に寄贈したのであった（博物館がアストンの遺産管財人より取得したことは『古版本目録』による）。

ケンブリッジ大学図書館への売却が決まっていたにもかかわらず、それが取り消されて大英博物館に送致されることになった経緯は不明である。ただ、アストンが生前、博物館の所蔵和書に大きな関心を寄せ、浅からぬ関係を持ったことは指摘できる。1898年刊行の *Catalogue of Japanese Printed Books and Manuscripts in the Library of the British Museum*（「大英博物館図書館蔵日本版本写本目録」、以下「版本写本目録」）の編者ロバート・ダグラス卿（Sir Robert Douglas）は、その自序において、編纂上の助言・助力をサトウ、榎原陳政（当時の在英外交官）、南方熊楠とともにアストンにも仰いだことを特記し、謝辞を捧げている。アストンが英国人日本学者として盟友サトウとともに博物館所蔵和書の調査・整理を行っただけではなく、この目録の実質的な編纂者の一人であったことが窺われよう。

また、アストンは博物館蔵和書に対して関心や関係を有していただけではなく、かねてその充実についても意を払っていた。そのことは「和書目録」作成時において、A類のいくつかの書物について「In B.M.」（大英博物館にあり）などと、大英博物館での存否を注記していることから知られる。さよらの注記を以下に摘記してみよう。

目録番号	書名	存否注記
A類		
56	本朝能書伝	in B.M.
65	標注刪修古事必読	In B.M.Cat.
66	大日本国開闢由來記	In B.M.Cat.
67	続日本紀	Not in B.M.
71	新撰姓氏録	Not in B.M. ought to be
73	日本書紀	In B.M.
77	宇治拾遺物語	In B.M.
78	春曙抄	Not in B.M. but ought to be
79	大和物語之抄	Another Edition in B.M.
80	平家物語評判秘伝抄	Not in B.M.
82	保元物語	Not in B.M.
84	群書一覽	in B.M.
85	異称日本伝	Not in B.M. ought to be
86	骨董集	In B.M.
87	竹取翁物語	In B.M.Cat. which has Daishiu for Ohide
88	竹取物語抄	In B.M.
89	可笑記	Not in B.M.Cat.
90	訂正標注方丈記	No edition of this classic in B.M.
91	土佐日記講義	This ed. not in B.M.
92	昔男時世妝	Not in B.M.
93	神楽入文	In B.M.
94	催馬楽歌入文	In B.M.
95	万葉集美夫君志	Not in B.M.Cat.
96	万葉考	Not in B.M.Cat.
96A	狂歌五十人一首	In B.M. (a later edition?)
97	狂歌五十人一首	In B.M. but 2y. later edition
97A	俳諧七部集	Not in B.M.Cat.
98	比古婆衣	Not in B.M.
99	伊勢物語	The B.M. has two editions of 1610. movable type. The same?
100	末賀能比連	Not in B.M.
101	当流小謡梁塵集	Not in B.M.C.
102	伊勢物語新釈	Not in B.M.
103	伊勢物語古意	In B.M.
104	新体詩抄初編	Not in B.M.C.

120	古今集遠鏡	In B.M.
133	南無阿弥陀仏	Not in B.M.C.
157	古今狂歌袋	Not in B.M.
160	梅花氷裂	This ed. not in B.M.
161	善知安方忠義伝前編	This ed. not in B.M.Cat.
165	古事記伝	Not in B.M.C. but ought to be
166	青砥藤綱模稜案	Not in B.M.
167	昔語質屋草	In B.M.
168	夢想兵衛胡蝶物語	In B.M.
169	敵討裏見葛葉	Not in B.M.C.
170	隅田川梅柳新書	A better edition is in B.M.
172	雪中梅	Not in B.M.
176	奥羽道中膝栗毛	Not in B.M.
177	風流勸進能	Not in B.M.
178	本朝三筆伝授鑑	Not in B.M.
203	万葉集略解	Not in B.M.
250	日本歴史答案	Not in B.M.
255	清俗紀聞	in B.M.
469	和漢三才図会略	in B.M.
664	大広益会玉篇大全	in B.M.
888	西洋品行論	in B.M.
893	新撰年表	in B.M.
946	田家茶話	In B.M.

存否注記の「B.M.Cat.」「B.M.C.」とはBritish Museum Catalogueの略記である。具体的にはアストンも編纂に大きく関わったと思われる先の「版本写本目録」(1898年)とその後1899年から1903年までの収蔵和書を採録した同じくダグラス卿による補遺 *Catalogue of Japanese Printed Books and Manuscripts on the British Museum Acquired During the years 1899-1903* (1904年、以下「補遺」)をさす。

ところが、ここで気にかかるのは、「in B.M.Cat.」「in B.M.C.」と「in B.M.」は同義かという問題である。「not in B.M.Cat.」「not in B.M.C.」と「not in B.M.」についても同様である。常識的には目録における存否はすなわち博物館における存否である。しかし、それならば、アストンは「in B.M.」「not in B.M.」と統一かつ機械的に注記するであろう(「in B.M.C.」「not in B.M.C.」でもよい)。あえて目録における存否と博物館における存否の両様の注記を行ったことに何か意味があるのではないか。微細に及ぶが、この点を検討しておきたい。

今、アストンの存否注記と「版本写本目録」「補遺」とを照合してみると、上掲57点の和書のうち、51点についてはとくに疑義は生じない。しかし、残る6点のうち、67、71、82、176については「版本写本目録」に採録されているにもかかわらず、アストンは「not in B.M.」と注記しており、逆に

77と946については「版本写本目録」に採録されていないにもかかわらず、彼は「in B.M.」と注記している。

これはいったいいかなる事情によるものか。むろん、アストンが「版本写本目録」を読み損なった可能性はある。目録には採録されているのにそれを見過ごして「博物館にナシ」と注記したり、目録には採録されていないのに採録されていると勘違いして「博物館にアリ」と注記したという可能性である。

しかし、以上の6点の注記はいずれも博物館における存否（「in B.M.」「not in B.M.」）であり、目録における存否注記（「in B.M.C.」「not in B.M.C.」など）については矛盾が見られぬこと、つまりアストンが明らかに「版本写本目録」を読み損なった事例がないことを考慮すると、先の6点の注記の矛盾については別の可能性を考えねばなるまい。それはアストンが目録における存否と博物館における存否を学究らしく峻別していた可能性である。すなわち、67、71、82、176の場合は、目録には採録されていることを承知しつつも、実際には博物館にはないことを熟知していたが故に「博物館にナシ」と注記し、77と946の場合は目録には採録されていないことを承知しつつも、実際には博物館にあることを熟知していたが故に「博物館にアリ」と注記したという可能性である。読み損なったどころか、「版本写本目録」の編纂に深く関与し、館蔵和書について精通していたアストンにして始めてなしえた厳密な注記であったと考うべきであろう。

さて、いささか岐路に逸れたが、本論に戻ることにしよう。アストンは生前から館蔵和書の充実にも意を払っていた。そのことは上記の71、78、85、165から読み取ることができる。これらにはいずれも「not in B.M.」あるいは「not in B.M.C.」と博物館あるいは目録にないことが記された後、「ought to be」（博物館にあるべし）の文言が加えられているからである。アストンは新撰姓氏録、春曙抄、異称日本伝、古事記伝といった和書について、大英博物館にはない、あるいは少なくともその目録には見当たらないが、当然博物館にあってしかるべき書物であると記したのである。自らの蔵書が大英博物館にもアリ・ナシと記すことまでは、いわば当該書物の参考情報といえよう。しかし、「博物館にあるべし」というのはアストン自身の意見の表明であって、蔵書の書誌情報としては逸脱している。アストンが博物館にふさわしい蔵書（和書）の拡充について日頃多大の関心を払っていたことを物語るものであろう。あるいは博物館より和書の蒐集についての提言を委嘱されるようなことがあったのかもしれないが、現在のところ、それを裏付ける資料はない。

もっとも、本節の主題であったA259の「近松27戯曲」については「博物館にあるべし」はおろか、存否注記すらない。ただ、これは小さいながらも一つの希観書コレクションであるから、存否注記はむしろありえず、「博物館にあるべし」との注記も不適であろう。アストンがA259について「博物館にあるべし」の意見はもつことはただちに寄贈を意味するのである。諸他の蔵書とともにケンブリッジへの売却が決まっていたこの小コレクションが大英博物館に送致されることになった経緯は不明である。ただ、アストンが日頃から博物館の所蔵和書に深く関わり、その拡充にも意を払っていたことからすれば、この「日本の戯曲のシェークスピア」にも擬せられる近松の浄瑠璃本にして柳亭種彦旧蔵本たる当コレクションを大英博物館に寄贈して館に貢献したいと思立ったとしても不思議ではない。アストンにとって、このコレクションは博物館に相応しい逸品との強い思いが

あったのではあるまいか。

19世後半から20世紀初頭にかけて、大英博物館では英国人日本学者からの和漢書・日本美術作品の寄贈（売却）が相次いだ。アストンと同世代で交流のあった人物としては医師のウィリアム・アンダーソン（William Anderson）とサトウがある。アンダーソンはアストンやサトウと同様、19世紀後半に日本に滞在し（1873-1880）、日本海軍において軍医教育に携わると同時に日本美術の作品収集に努め、帰国後の1882年、94年にはその一大コレクションを大英博物館に売却譲渡した。またサトウも1884年、85年に大量の和漢書を館に売却している。ちなみに、アンダーソンが売却したものの中にはかつてアストンよりアンダーソンに譲られた書物が3点含まれている。アストンの蔵書印記が捺存する伊勢物語（嵯峨本）、日蓮上人註画讃、八種画譜がそれである。

しかしながら、アストン自身が生前において博物館に寄贈（売却）した書物は今のところ確認できない。アストンはその蔵書を基本的にはケンブリッジに寄贈（売却）し英国・西欧の日本学発展に寄与する途を択んだのである。その蔵書の大半の原蔵者（貸与者）であった盟友サトウの意向もあったであろう。ただ、一方でそのサトウやアンダーソンらがしばしば蔵書・作品を博物館に寄贈（売却）していたことはアストンにも何がしかの影響を与えていた可能性がある。あるいはここでもサトウの勧めがあったかもしれない。アストンはその蔵書の中からは博物館所蔵和書の拡充に多少とも寄与するために、選りすぐりの逸品として「近松27戯曲」を博物館に寄贈（売却）することにしたのであろう。もっとも、そのような和書はこの「近松27戯曲」だけであったとは限らない。他にも目録作成後、ケンブリッジから博物館に寄贈（売却）先を変更したものがあつたであろう。

先述のように、「近松27戯曲」を記述した「アストン和書目録」A259では記載全体が抹消され、追筆で「Cancelled. Sent to B.M.」と記されている。本目録においては、これと類似の抹消・追記例が実は3点認められる。いづれもA類で、1014萬葉集講義、1015大日本史、1059信貴山縁起である。全体が抹消され、追記は「Cancelled」（取り消し）とのみあって、変更先（送致先）の記述はない。当然ながら、3点ともに現在ケンブリッジ大学図書館には伝わっていない。また、このうち、1014と1059は『総目録』による限り、大英博物館に寄贈された形跡もない。しかし、アストンが「権威ある日本の歴史」（『Standard History of Japan』）と評した1015の大日本史については、現在大英図書館に伝わる嘉永4年（1851）刊の同書（『総目録』178頁、アストン蔵書印なし）100冊が1015の書誌記載と合致しており、その館の受入れ印記も「1912年10月12日」であることから、「近松27戯曲」同様アストンの死後館に寄贈（売却）されたと見てよい。

さらに、「アストン和書目録」に採録されていない蔵書で彼の死後、「近松27戯曲」とともに博物館に遺産管財人を通じて寄贈された和書として、倭漢朗詠集（『総目録』106頁、アストン蔵書印あり）がある。館の受入れ印記はやはり「1912年10月12日」となっている。

このように、晩年のアストンはいくつかの蔵書については大英博物館に寄贈（売却）する意思を持つに至り、その死後、遺産管財人によってその遺志が果たされたのであつた。

以上、大英博物館に寄贈（売却）されたアストン旧蔵「近松27戯曲」について、実地調査をふまえてそれらの特定を行い、あわせてこの寄贈の背景に関する若干の事柄について秃筆を馳せてき

た。本節を閉じるにあたり、最後に川瀬一馬・岡崎久司両氏に敬意と謝意とを表しつつ、『総目録』五「音楽・演劇」5「浄瑠璃」について補訂を加え、さらに「アストン自筆英文小紙片」の英文（[]内は意補）を最小限の註とともに掲げておくこととしたい（頁数はすべて『総目録』による）。

135頁

- ・ 藍染川 補訂ナシ

[英文]

[Aizome]gawa. Published in Kioto by

Yamamoto Kiubei in 1684.

[d]oubtfully ascribed to Chikamatsu

a former owner of this copy.

Not mentioned in T.B. or Jiuni

Bunka lists.

(英文中の括弧は筆者の推定。以下同じ。)

註：T.B. 博文館刊行の『帝国文庫』第42篇近松時代浄瑠璃集(1898年)および第50篇近松世話浄瑠璃(1903年)をさす。

Jiuni Bunka Lists Jiuni Bunkaは民友社刊行の『十二文豪』を「じゅうにぶんか」と読んだもの。Listsとはその第7巻塚越芳太郎『近松門左衛門』(1874年)の附録「近松門左衛門著作表」をさす。「アストン和書目録」A259の「日本の戯曲のシェークスピア」は塚越の本著によるか。

- ・ 佐々木先陣 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

[英文]

Sasaki no O-Kagami also called

Sasaki Senjin. Takemoto Gidayu

1686 (The date is given in the

Postscript which is unusual.)

- ・ 天智天皇 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

[英文]

Tenchi Tenno. Hist. Drama

Osaka, Takemoto Chikugo no Suke

1689

註：Takemoto Chikugo no Suke 竹元筑後掾(義太夫)のこと。

- ・ 初日上卷本領曾我 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

[英文]

Honryo Soga. Hist. Drama

Takemoto Chikugo no Suke. 1693

Usual note that it has been

revised

- ・ 浦嶋年代記 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文
 Urashima nendaiki. Hist. drama
 Osaka. Takemoto Chikugo no Suke
 1700 Note of revision

- ・ 最明寺殿百人上臈 「判紙小本」ヲ補入
英文
 [S]aimiyojidono hyakunin Joro not in T.B.
 published at Osaka in 1703 by the
 Takemotoza. Historical drama

- ・ 紅葉（栴）狩劔本地 補訂ナシ

- ・ 男女心中重井筒（追善重井筒） 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文
 Shinchiu Kasane idzutsu. Published
 by Takemotoza, at Osaka in 1704. Domestic
 drama

- 136頁
- ・ 心中二枚繪草紙 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文
 [Shinchiun]imai ye-zoshi Domestic
 Takemoto Chikugo no Suke
 Note of revision by
 C.
 註：C Chikamatsu Monzaemonの略号。

- ・ 堀川波鼓 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文
 [Hori]kawa Nami no Tsutsumi. Dom.drama.
 [O]saka. Takemoto Chikugo no Suke.
 1707. Note by Chikamatsu that
 it has been revised according to the
 M.S.

- ・ ひらがなけいこ本丹波與作待夜の小屋節 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

英文

Tamba Kiosaku Domestic Dra[ma]

Osaka Takemotoza 1707

Certified correct by Chikamatsu

in a postscript

- ・ 淀鯉出世瀧徳 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

英文

Yodogoi no shusse notoku

published at Osaka in 1700 by the

Takemotoza. In T.B. Domestic drama

- ・ おなつ清重郎五十年忌哥念仏 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

「(アストン舊蔵)」ヲ補入

英文

Gojiu nenki uta nembutsu or

simply Utanembutsu. Osaka Takemoto

Chikugo no Suke. 1709 Dom. Drama

Note of revision

- ・ 二郎兵衛おきさ今宮の心中

英文

[I]mamiya no shinchiu Another title

is Kake-tai no shinju

Osaka Takemoto Chikugo no

Suke 1710

Revised by Chikamatsu

- ・ 曾我虎が磨 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

英文

Soga tora ga 磨 1710 Included

in Teikoku Bunko edition. Jidai

loruri. Historical plays.

Last leaf imperfect. One other torn

but written in M.S.

Not in Jiuni Bunka list (抹消)

- ・吉野都女楠 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文

Yoshino Miyako Onna Kusunoki
 published at Osaka by Takemotoza
 1711 Hist. drama

- ・長町女腹切 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文

Nagamachi onna harakiri
 Domestic Drama
 Takemoto Chikugo no Suke. Osaka
 1700 Usual note of revision by
 Ch.

137頁

- ・夕霧阿波鳴渡 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文

Yugiri Awajima to ? Published 1710
 by takemotoza Domestic Drama
 revised for publication by Chikamatsu

- ・天神記 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文

Tenjinki. Osaka. Takemotoza 1713

- ・山崎與次兵衛壽の門松 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文

Yamasaki Yosabei Kotobuki no
 Kadomatsu Domestic Drama
 Osaka. Takemoto Gidayu. 1715

- ・博多小女郎波枕 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入
英文

Hakata Shojoro nami makura
 1718 Domestic Drama. In T.B.
 published at Osaka by Takemoto
 theatre. Spurious editions busily
 appeared, the publishers have
 published this one.

- ・日本武尊吾妻鏡 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

英文

Yamatodake Adzuma Kagami

Osaka, Takemoto Chikugo no Suke 1720

Dom (抹消) Hist. Drama

- ・津国女夫池 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

英文

[T]su no Kuni Myoto ga ike

[Do]mestic Drama. Osaka Takemotoza

[17]31 corner torn Postscript

[le]af torn away

- ・上巻女殺油地獄 「巻首にアストン自筆英文小紙片あり」ヲ補入

「京都 正本屋山本九兵衛」ヲ「大坂 正本屋山本九兵衛」ニ訂正

「(アストン舊蔵)」ヲ補入

英文

[On]na Koroshi Abura jigoku Published

[Wo]man murder oil hell

Takemotoza in 1731 Domestic Drama

- ・後日下巻加増曾我 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

英文

Kazo Soga Not mentioned in any

of my books. No date or

publisher's name

Is this the same as Yotsugi Soga.

date unknown but an early work

註：Yotsugi Soga 世継曾我

138頁

・小そでうり 「巻首にアストン英文自筆小紙片あり」ヲ補入

英文

Story. 18th century

Scene based 15th cent.

Poetry competition of

Young ladies of Shogun's Court

at Kamakura. Afterwards

fighting.

P135~138 以下ノ文ヲ補入

「主馬判官盛久 竹本義太夫正本 後印10行本 判紙小本 巻首にアストン自筆英文小紙片あり

(京都 正本屋山本九兵衛) 近松門左衛門

(アストン舊蔵)」

冊) 1 函) 16104 架番号) b20

英文

オ) [Shu]ma Hangwan Seikiu published

at Kyoto by Takemoto Gidayu

no date Note that Chikamatsu

Compared it with his own copy

The Jiuni Bunka says it was

published by Takemoto Gidayu Uji kaga no Suke

ウ) in Kyoto. Perhaps this present is a second edition

Date unknown but one of his earlier

works, probably about 1680-1690

本稿は平成29年度日本学術振興会科学研究費（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C）「先駆の英国人日本学者による国学の受容と評価に関する発展的研究」による研究成果の一部である。